



令和元年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 8 号

令和元年12月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

豊かな心を育む

校長 富田 敦

鉛筆が ポキッとおれて また削る 心ポキッと おれた気がする

さいたま市子ども短歌賞で入選した 芥川 未怜さん（2年）の短歌です。この歌は、日常の身の回りのことに目を向けた作品です。芥川さんはこの作品について、「字を書くとき、強く書くと『ポキッ』と折れてしまうことがあります。何回も繰り返すとだんだんいやになってきます。同じことを小学校4年生の弟もやっていて、『芯が折れるといやだ。また削らなくてはいけない』と言っています。私も鉛筆の芯が『ポキッ』と折れると、集中力がパッと消えてしまうことがあります。そんな様子を「心ポキッとおれた 気がする」と表してみました」と話してくれました。また短歌を作る際、「『ポキッ』という比喻（たとえ）表現を使う方がその場の雰囲気伝わりやすくなると思いました。そして、五七五七七の音数に合わせて表現を考えました」と表現の工夫について話してくれました。

誰にでも経験のある日常的な出来事に着目した芥川さんの瑞々しい感性が、審査員の目に留まったことをうれしく思います。また、声に出して詠んでみると、とてもリズム感のある歌だということにも気づかされます。さいたま市子ども短歌賞は今年、約1万4千人が応募したコンクールです。その中で感性がきらりと光る作品であったのでしょう。

11月27日に土呂中学校体育館では車いすが躍動しました。NPO法人インフィニティから車いすバスケットボール「埼玉ライオンズ」の森田 俊光代表理事をはじめ4名の選手を招き、3年生が体験学習を行いました。車いすバスケットボールはパラリンピックの種目であり、人気も高いです。森田さんから「車いすバスケットボールには『車いすのうえで立ち上がってはいけない』というルールがある。これは健常者も車いすバスケットボールの大会に出場してよいという規定ができたためだ」と聞き、この種目が健常者も一緒に行うことができる素晴らしいスポーツなのだ改めて感心させられました。この日は、見るだけでなく代表生徒が参加し、クラス対抗で試合を行い、大いに盛り上がりました。



クラスの大応援を受けてプレーする

「とても笑顔で話してくださいましたが、自分のけがや病気を受け入れ、笑ってスポーツに取り組むことができるまでにたくさんつらい思いや悲しみを体験してきたのだろうと考えてしまいます。スポーツがそのつらい思いを乗り越えるカギとなったなら、スポーツの力はすごいと思います。私は実際に体験させていただき、思っていた以上の難しさに驚きました」（遠藤 可奈さん）

「体験をしてみて、攻めたくてもボールを扱うことと車いすを操作することの両立が難しく思うようにプレーができませんでした。今までパラリンピックに興味をもっていなかったけれど、今回の話を聞いて、見てみたいと思いました」（山田 陽菜さん）

「一番印象に残ったのは『スロープがただあるだけで上れないものがある』という話です。ただスロープをつけて『こちらはバリアフリーです』と言っている所があると思うと心が痛みます。今回、今まで考えられなかったことや新しい視点で目を向けられるようになり、考えを深めることができました」（岩崎 彩さん）

森田さんからは「パラスポーツの精神である『失ったものを数えるな。残されているものを生かせ』『あきらめずに最後までやりきれ。あきらめない限り、自分の力は伸ばせる』」というメッセージを託されています。

令和元年もあと1か月となりました。この1年間、地域の方々や保護者の皆様からのご支援、ご協力に感謝申し上げますとともに、新しい年が皆様方にとって素晴らしい年となりますことをお祈りいたします。